

平成 24 年度 海外臨床薬学研修報告書
「南カリフォルニア大学研修から学んだこと」

研修期間：平成 24 年 8 月 19 日～9 月 1 日
研修先：南カリフォルニア大学薬学部

薬学部薬学科 5 年

080973336

鈴木 守人

今回私たちは、2012年8/19(日)から9/1(土)まで南カリフォルニア大学薬学部にて米国薬剤師が病院、薬局でどのような業務を行い、社会、患者に貢献しているか。また、日本の病院、薬局、薬剤師の業務、保険制度とはどこがどのように異なっているかを知り、学ばせて頂くために海外臨床研究に参加させていただきました。このレポートでは、私たちが何を見学し、学び得たかを報告したいと思います。

初日9/20(月)USC school of pharmacyにてDr.WINCOR、pharmDの学生方によるオリエンテーション等がありました。続いてUSCについて説明して頂きました。そこで知った事は、米国薬剤師になるには、まず大学を卒業し学士の資格を得てからではないと薬剤師になるための大学には入れないという事。これは、当然のことながら、日本と違い、入学した時点で米国薬学生はモチベーションが高いのではないのかと感じた。また、薬学生になるとテクニシャンのような調剤権が与えられ、薬局で働いて単位を取得しなければならないという事。これにより、米国薬学生は初年度から臨床現場に触れ、薬剤士としてのプロ意識、仕事の流れ、知識や患者の接し方を早期に体験し覚えることで、すぐに社会にでも即戦力として活躍できるようになり、日本よりも優れた薬剤師になっている一つの要因ではないだろうかと考えられる。9/21(火)には南カリフォルニア大学の本学に連れて行ってもらい向こうの学生生活の一端に触れることができた。9/22(水)はHIPAAという医療情報の電子化の推進とそれにまつわるプライバシーの保護、セキュリティの確保のあり方を定めた法律の事である。このHIPAAは、すべての医療サービス提供者(病院、医師)、医療保険者(保険会社、自家保険者)、および医療情報センターに適用されるため、私たちもHIPAA教育を受けました。これは後のclinical tourで知った事だが、患者は保険会社にアレルギー、既往歴などの患者情報を登録することで、日本と違いすぐに保険者番号を調べることで日本の問診票に書かれている情報をすぐ引き出せることが可能となっている。利便性が高いが患者情報の漏えいのリスクが高い。そのためこの電子化した患者情報を保護、漏えいさせないことが必須となっている。この事から僕は、勿論リスクもあるかもしれないが、日本で使われているお薬手帳を米国のように電子化し、情報を一括管理したら良いのではないだろうか。なぜなら、患者がわざわざ病院、薬局に行くのにお薬手帳を持つ手間は省け、問診票をいちいち書く手間も省けることができるからだ。また、実際今、薬局実習に行っているが患者からお薬手帳を持ち歩くのが面倒とも聞くからだ。そして、9/22(水)、9/23(木)、9/28(火)にわたって、medication counseling、精神疾患であるうつ病、不眠症の講義をDr.WINCORからして頂いた。medication counselingでは、薬剤師が服薬指導する時に患者に話す事、聞くべき事を習った。そこで、日本のような初回面接、服薬説明では共感的言葉をかける事は習わなかった。また、講義だけでなく自らCASE STUDYといって、実際のうつ病患者の症例から適切な薬物を選択する薬物治療学のようなグループディスカッションを行った。その際、SOAP形式を用いた。そこで興味深かったこととして、SOAPの形式がASSESSMENTのリスクファクター(病因)と治療の必要性(推奨される治療)の2種に別れており、PLANでは3種に分かれ、それぞれ推奨される薬、避けるべき薬とゴール、モニタリングと患者教育から成り立っていたことである。この形式が、米国のスタンダードかは判りかねるが、日本の場合と比べた場合、細かく分かれていて記入しやすいし、どこに何が書かれているのか見つけやすいと感じた。だが、こ

れを臨床現場で実際書くのは煩雑になるのではないかと感じた。それに伴い、うつ病から生じる不眠症の講義をして頂いた。その講義の合間に、ケーススタディがあり、うつによる不眠症患者にトラゾドン 50mgを処方することは適切かということを議論した。(うつ治療に対してはセルトラリン 50mgを処方)日本においてうつに伴う不眠症としてガイドラインに記載されているベンゾジアゼピン系の薬を処方すると思っていたが、結果として、抗うつ薬(トラゾドン)に不眠症を処方することは適切だという結論になった。そこで、日本に帰国後、トラゾドンが日本で不眠症に使われているのかを調べてみた。トラゾドンはベンゾジアゼピン系の薬よりも日中眠くなりやすく、日本でも最近使われ始めているという事を知ることができた。ただ、作用機序が似ている薬を2種類処方することで、仮に副作用が生じた場合は、どちらの薬によるものなのか見極めるのが困難になるのではないかという疑問が生じた。日本と外国の処方の違いから色々な薬の選択を考えるととてもいい機会になった。

8/24(金)は Radisson hotel で開催された糖尿病学会に参加させて頂いた。リスニング能力不足のため、理解できることがとても少なかった。だが、スライドに書かれた事から理解したことで、米国の糖尿病患者は、日本と異なり外科的(胃を縮小させすぐに満腹感をもたらす)に肥満を改善させることにより、糖尿病を改善させることを知り驚かされた。たしかに米国の街を歩いてみても肥満体型な人はやはり日本に比べてみても多いと感じた。これは、明らかに食事が原因であり、それをまず改善していくべきだと感じた。8/27(月)には El Monte にある private pharmacy(薬局)を見学させて頂いた。米国には private pharmacy と community pharmacy があり、前者は、病院と提携している近隣の薬局のことであり、後者は、CVS pharmacy などのチェーン展開をしている薬局を指す。El Monte にある private pharmacy の薬局業務のは大きく分けて二つある。一つ目は、外来患者の処方箋を clerk が預かりテクニシャンが調剤し薬剤師が監査し、薬をボトルに入れ渡し、服薬説明する。先も少し触れたが、外来患者が保険会社に加入していれば、保険番号から患者の基本情報や、アレルギー、既往歴がすぐに検索することができ、患者は問診票を書かずに薬を受け取ることができる。ボトル処方、ディスペンサーにより自動的に調剤を行い、ボトルには、英語、スペイン語、中国語で薬の名前、効果、副作用、用法用量が書かれていた。これは、ヒスパニック、アジア系のアメリカ人がロサンゼルスに多い事に由来する。二つ目は、提携している病院の入院患者の調剤(一包化)、注射剤の混合調製である。一包化シートは日本より数倍大きく、病院看護師が薬を飲んだかチェックする用紙も一緒に添付されている。一包化シートがカレンダーのようになっており、飲み忘れのチェックがひと目で判る。この工夫はコンプライアンス向上のためだと考えられる。衛生面に関して言えば、結論から言うと日本のほうが優れていると感じた。勿論、テクニシャン、薬剤師は患者の前では白衣を着用しているが、患者の見えないところでは、テクニシャンが白衣も着用せず、素手で一包化を行っており、クリーンベンチがある調製室では、エアーシャワーもなかった。日本の調剤薬局にはない美点として、糖尿病患者用の靴が売られていたことがある。糖尿病用靴の最大の目的は、下肢切断を防ぎ、患者の ADL(日常生活動作)や QOL の低下を防ぐことだ。そのためには足部に潰瘍を作らせないことが最も大切である。一般用の靴では靴擦れなどの靴の不適合に起因する潰瘍形成や切断のリスクを高めてしまうからである。こういった予防

ケアは、患者だけでなく、医療費の負担低下に繋がるため、日本も見習う点だと感じた。

8/29(水)では USC 大学構内の外来がん患者専用の「Norris comprehensive cancer center」を見学させて頂いた。その薬剤師業務は、患者の処方箋チェックしながらピッキングし別の薬剤師がレジメンと処方箋を共に、ピッキングした抗がん剤を監査し、調製室にいるテクニシャンに抗がん剤を渡すまでである。その後薬剤師はテクニシャンが調製し終わった空アンプル、バイアルのチェックは行わない。そしてがん専門薬剤師になれば、抗がん剤の投薬を行うことができると初めて知った。またテクニシャンも一定期間の実務をこなし、試験に合格できれば、抗がん剤調製することが可能となる。8/30(木)研修最後の日には、「Keck medical center of USC」の見学をさせて頂いた。この施設の中に private pharmacy が入っており、薬剤師は USC university hospital で診察を終えた外来患者から処方箋を、預かりテクニシャンが調剤し、監査し薬を提供する業務が主である。ただ、El Monte にある private pharmacy との業務内容の違いとして、カウンセラー室があり薬剤師がそこで、患者に慢性疾患の病気である糖尿病、高血圧、高脂血症などに対し無料カウンセリングをすることだ可能となっている。また、有料で海外旅行に行く前の予防接種なども実施されている。そして、OTC 薬が薬局前に並んでいて、勿論処方箋なしで購入することができる。以上が、私達が今回研修させて頂いた内容だが、その他にもアメリカ文化に触れる経験としてメジャーリーグ、ハリウッドボールに連れていってくれ、ウェルカムダイナーやクロージングダイナーを開催してくれたり、色々お世話をして頂いた pharmD の Tina、Sara、Grace に厚く御礼を申し上げたいと思います。また Dr. Wincor には色々御教授して頂き誠にありがとうございました。そして最後に、引率者として私達を最後まで面倒を見て下さいました野田先生、小嶋先生、本当にありがとうございました。

この経験を通して、私は、自分の薬剤師像を再認識することができました。本当にありがとうございました。